

# 平成 20 年度 農業技術支援センター試験研究等実績概要

## 1 平成 20 年度環境保全型農業(野菜部門)実証展示栽培について

夏まきアブラナ科野菜(ブロッコリー)などを加害する夜蛾(やが)の仲間の行動を抑制する‘黄色防蛾灯’を使用することにより、減農薬栽培ができるのか検討した。

(結果)

黄色防蛾灯を設置した農業技術支援センター内のほ場に比べ、無設置の向丘地区生産者のほ場ではオオタバコガ、ハスモンヨトウとも約3倍の捕殺数が観察され、設置区では、夜蛾類の夜間行動抑制の可能性が示唆された。黄色防蛾灯は日長の影響を受けない野菜であれば、農薬のように登録の問題がなく、いろいろな野菜で使用できるため、少量生産される直売向け野菜や新種の野菜など、農薬登録の少ない野菜を作るときに有効だと思われる。ただし、夜間に黄色の光は目立つため、住宅地では近隣に配慮する必要がある。現時点では効果が高いと確認できていないため、次年度も引き続き検討していく。

## 2 ナス新品種の収量調査結果について

神奈川県が作出し、推奨しているナスの新品種‘サラダ紫’を農業技術支援センターほ場で比較試験し、収量、特性などを調べ、普及にむけた利用方法について検討した。

(結果)

‘サラダ紫’は、比較対照とした‘千両二号’と同様の管理を行っても、側枝の発生や枝の強さなど生育に大きな違いは見られず、花芽の着生については、終始‘サラダ紫’の方が良かった。収穫果実数は10%程度少ないが、平均果実重は40g以上重く、収穫果実重では1株当たり3,885gも重いことがわかった。試作を依頼した農家からは、味は良いが着果数が少ないとの声が聞かれた。‘サラダ紫’は食味が良好で皮が柔らかく、生でも食べられる特長があり、販売単価を高く設定できるため、特長を説明して販売を行うことができる直売農家には今後優良な品種であると考えられる。

## 3 トマト新品種の収量調査結果について

神奈川県が推奨する橙黄色のトマトの新品種‘桃太郎ゴールド’を通常の主枝一本仕立てと連続摘心(二段ごと)に果房の上二葉残して摘心)で試験栽培し、普及にむけた利用方法について検討した。

(結果)

‘桃太郎ゴールド’は比較対照とした‘桃太郎エイト’に比べ15%以上果実重が重いことがわかった。試作を依頼した農家がセレスアモスで毎日10袋程度販売し、残ることがなく良かったと話していたが、これは、赤いトマトがたくさん並ぶセレスアモスなどの直売所で橙黄色のトマトが目立ったためではないかと考えられる。果実が大きく、食味も悪くないうえ、果実の色が柿のような色で変わっており、目新しく見えることから、直売向けとして少量販売するには良い品種だと思われる。

## 4 のらぼう菜の摘心方法の違いなどが収量に及ぼす影響について

かわさき農産物ブランド‘かわさきそだち’に登録されている‘のらぼう菜’20系統のうち優良な4系統を選び、収穫開始時の株の摘心方法や花茎の収穫位置の違いが収量や糖度に及ぼす影響について調査した。

(結果)

系統別の収量は早生ほど多く、摘心方法では、浅摘心、無摘心区に比べ深摘心区の収量が最も多かった。糖度は収穫初期が最も高く、収穫がすすむにつれ、徐々に低下していくことがわかった。本市のように直売中心で少量多品種を栽培する場合は、極早生、早生を中心に作付けし、中生、晩生も一部組み合わせて栽培することが、品質の良いものを長期間販売できて良いと考える。

## 5 性フェロモン剤を利用したナシの減農薬栽培について

農業技術支援センターのナシ園に交信攪乱剤（コンフューザーN）を設置し、慣行栽培の生産者と比較することにより、性フェロモン剤を利用した減農薬栽培の防除体系について検討した。

（結果）

試験区（農業技術支援センター）において、本市で作成している「平成20年度多摩川なし病害虫防除暦」の総散布回数15回に対し、20%の減農薬栽培を行った。試験区‘幸水’の被害果率は23.7%で、対照区（生産者）は‘幸水’が10%、‘豊水’が45%であった。本年度は収穫期後半にナシヒメシクイの発生が多く、対照区の‘豊水’に被害が目立った。

## 6 ナシ栽培における環境保全型農業への取り組みについて

性フェロモン剤を利用した環境保全型農業を推進するため、生産者の協力を得て調査園を設置することによりナシヒメシクイの発生活動を把握し、情報提供した。

（結果）

黒川では、昨年同様5回の世代が出現したと考えられる。ただし、昨年は3～4世代の発生は緩慢であったが、今年の発生は非常にわかりやすいものであった。また今年も第5世代以降の捕殺も確認された。ナシヒメシクイの発生世代は年間4～5回とされている。過去の捕殺数を見てみると大きく変動するケースもあり、気象状況等をふまえて適切な情報が提供できるよう、引き続き調査を行う必要があると考える。

## 7 ナシ赤星病の発生予察について

ナシ栽培における効率的かつ適正な防除を図るため、赤星病冬孢子堆の成熟状態を観察し、農業協同組合を通じて予察情報をナシ生産者に提供した。

（結果）

発生予察情報を3回提供した。平成20年は3月の気温が高く、4月には気温の急激な低下と降雨があったが、小生子の飛散は予想しやすい年であった。市内生産者の防除は適切に行われたと思われ、5月以降に若干の発生が確認されたが、実害がほとんどなく良好であった。

## 8 カメムシの発生予察について

ナシ、カキ等の果実を加害するカメムシ類の発生予察をフェロモントラップにより行い、生産者あて情報提供した。

（結果）

今年度の発生量は平成13年度とほぼ同程度で、年間の捕殺数は多い年ではあったが、全市的に見るとナシの果実への被害は少なかった。

## 9 ナシ花粉採取事業及び貯蔵事業について

多摩川ナシの生産安定と品質向上を図るため、農業協同組合との共同事業として、花粉の開葯及び貯蔵事業を実施した。

（結果）

生産者から預かり農業技術支援センターで1年間貯蔵した花粉の返却時平均発芽率は約64.9%で、人工受粉に供するに十分な保存状態であった。

## 10 露地切花栽培における環境保全型害虫防除について

環境保全型農業推進の一環として、露地切花栽培において環境負荷の少ない薬剤を用いた鱗翅目害虫の防除効果について検討した。

（結果）

ケイトウとヒマワリについて環境負荷の少ないBT剤やIGR剤を用いて比較試験を実施した結果、ケイトウ

の収量は対照区に比べて試験区で多く、秀品率も試験区の方が高かったが、ヨトウムシ類、オオタバコガによる被害は試験区の方が多かった。ヒマワリの収量は試験区で多かったが、秀品率は対照区の方が高かった。ヨトウムシ類によるヒマワリの被害は試験区で多かったが、オオタバコガによる被害は対照区の方が著しく多かった。今回の試験では、環境保全型防除の観点からは、明瞭な差は観察されなかった。

### 11 シクラメン栽培における排液分析値を用いた施肥管理について

シクラメン栽培において排液分析値を用いた施肥管理方法を確立するため、川崎市鉢物研究会の協力を得て、生育期間を通じた排液の肥料成分濃度の経時変化を把握した。

(結果)

排液の硝酸態窒素濃度、pH、EC、及び可給態リン酸濃度について、それぞれの適正値をおおむね把握することができた。また、植え替えによる肥料成分濃度の変動を抑制することにより、根腐れによる株の枯死が軽減されることが示唆された。また、生産者ごとの栽培体系についても有用な資料の取りまとめができた。

### 12 ボトキラー水和剤のダクト内投入によるシクラメン灰色かび病の防除について

環境にやさしい殺菌剤「ボトキラー水和剤」のダクト内投入によるシクラメン灰色かび病の防除効果を検討した。

(結果)

花ボト（花に発生する灰色かび病）の発生は調査期間を通じて試験区よりも対照区において多かった。葉ボトの発生は花ボトに比べて全般に少なく、試験区では調査期間を通じて全く認められず、対照区でわずかに発生したにとどまった。ボトキラー水和剤のダクト内投入は、シクラメン灰色かび病の防除、特に花ボトの防除に有効であると考えられる。

### 13 平成 20 年度土壌分析結果について

市内露地野菜、施設野菜、果樹等の生産基盤である土壌について、化学性の分析及び診断指導を行った。

(結果)

区分	露地野菜	施設野菜	果樹	花き*	その他	養液分析**	計
件数	339	71	63	385	0	345	1,203

\* 花きにはシクラメンの排液分析 352 件を含む。

\*\* 養液分析は横浜・川崎養液耕研究会の協力による。

本年度は肥料原料の高騰により肥料の価格が上昇し、多くの生産者が余分な肥料を撒かないよう認識したせいか、土壌分析の件数は昨年度に比べ 100 件以上増加した。